

カフエの女給と駆け落ちしたもの、女の稼ぐチップを当てに、
無聊をかこつ新進作家。分かり合うことのない女との暮ら
しぶりや文学で身を立てる見通しの立たない焦燥感を精
細な筆致で浮き彫りにした「路草」。私娼窟の女を逃がす
手引をしながらも娶る気はないという、身勝手な正義感と
自己満足に浸る坊ちゃん育ちの男を、軽やかに描く「朽花」。
異なる手法による、作家の潜在能力を示す初期の名品二篇。



9784065404225



1920193022001

ISBN978-4-06-540422-5

C0193 ¥2200E

路草 | 朽花
川崎長太郎初期名作集
川崎長太郎

カ N8
定価：本体2200円（税別）

横溢する
語りの力

講談社
Y2200
文芸文庫

路草

川崎長太郎初期名作集

文体の
魅力の
あふれる
小説

kawasaki chōtarō

川崎長太郎

朽花

歿後四十年、
長太郎節を
存分に堪能できる
作品集

講談社文芸文庫
Kodansha Bungei bunko



勝又 浩

しばらくぶりに長太郎節に沈湎して強いお酒、
それもあり癖の強い地酒に酔わされた気分である。
——そんな、そんな、それはないよ、と思いながらも、
ぐんぐんと惹きこまれてしまうこの迫力。
この力はやはりその文章、独特な語りの力であるだろう。

「解説」より

瀬太員城山

小津大蔵

小津大蔵



目次

路草

七

朽花

一四三

参考資料

飛沫

参考資料

三八

『朽花』のこと

参考資料

三六

解説

勝又浩 三五〇

年譜

齋藤秀昭 二六一

著書目録

齋藤秀昭 二八六

路草／朽花 川崎長太郎初期名作集

しばらくぶりに長太郎節に沈湎して強いお酒、それもかなり癖の強い地酒に酔わされた気分である。——そんな、そんな、それはないよ、と思いつながらも、ぐんぐんと惹きこまれてしまうこの迫力。この力はやはりその文章、独特な語りの力であるだろう。

次は「路草」の「その二 隻脚」の初めの方にある場面である。

民枝はうつむいてしまつて、別々になつて二人が喰べて行くのより、いつしよにいて喰べられない方がいい、と糸のような目に青い炎を明滅させたり生きるのにそんなわずらわしい思いをするより一思いに死んでしまひましようよ。私、人から何んと言われたつて、いつしよに死ぬのが今なら仕合せに思ふわ。またあなたが家を持てるようになるのも、この先、いつの事だか解らないでしょう。私が女給や女中になつて待つていたつ

て。(……) 私、あなたの氣づかない間にあなたを殺してしまいたくなる時があるわ。だつて殺してしまわなければ、生身の人間ですもの、本当に安心できないわ(……) 私がそうしたと解つても、あなたは笑つて死んでくれる？ 今が一番いい時よ。いつしよに死んでしまひましようよ。こんな世の中に、何の目当があつて？ 私も彼女の言葉につりこまれて心中もいい、と呻くように言うのであつた。

長い引用になつたが、そうなつてしまふ理由もお分かりいただけたのではないだろうか。こんな情景が、ここでは延々三ページ余も続いているが、そこがまさに聞かせどころなのだ。

念のため舞台背景を少し補つておくと、今二人は次のような情況にある。行き詰まつた「N市」(名古屋市)での生活から再び東京に逃げ帰つて、とりあえず「K坂裏」(神楽坂裏通り)の安下宿、その玄關脇の一日中陽の当たらない四畳半に納まつた、そこでの愁嘆場というわけである。付け加えれば、「ガマ口の中には五十錢銀貨一個と銅貨三つ」しか入つてなかつた、とある。二人で蕎麦が食べられるかどうかというところである。文楽や歌舞伎であればまさに「口説き」の場面、古典的な設定なのだ。

言い換えると、ことさらカギ括弧つきの会話形式を避けて人物(民枝)が自らの心裏心情を長々と訴えるのだが、その間にとりどころ合ひ方(私)の受け答えを差し挟むこ

とによって、会話全体が「民枝」のことはでありながら「私」の心情の吐露ともなつてゆくという仕組みである。「路草」にはこんな仕掛けがあつて、読者をぐんぐんと引つ張っているわけだ。

もとより川崎長太郎の文章文体というふうを考えれば、こうした語りだけに尽きるわけではない。とくに「抹香町もの」あたりから顕著になる、一人称で語りながらしばしば自らを「らしかった」、「ようであつた」等々の三人称視点で叙してゆく特異なスタイルは良く知られている。これは厳密には文法破りであろうが著者自身は、「私に即して私を抜ける、つまり自分のしたことを他人のようにみ、且書くということである」(「私小説作家の立場」と言っている。人は自分の心さえ自分で測りかねるのが常だから、本人から、「とる」として、これには少々まいっているらしい」と聞かされても、さもあらんと、大した抵抗もなく受け入れてしまうのだ。

あるいは句点の極端に少ない、一つの文脈のなかにさまざまなものを盛り込んで、うねるように何ページも続いてゆく文章もある。そうした例の典型でもあつた中編「泡」は「国宝的な文章」(田宮虎彦)だと言われたりもしたが、その「国宝的」の語には、日本の話芸の伝統を継承するという意味があつたのかもしれない。つまり、これも語り芸としての文体なのだ。

こうした長太郎文体のあれこれの思い浮かべながら、私は川崎文学の《道行き小説》と

いうもう一つの性格に気が付いた。道行きとは、日本人が大好きな、たとえば、あの「お軽・勘平」(「仮名手本忠臣蔵」)であり、「お初・徳兵衛」(「曽根崎心中」)であり、「小春・治兵衛」(「心中天の網島」)等々のさわり部分である。これら心中ものの二枚目男たちはたいていツツコロバシ、ただただ女たちに優しいばかりで、いかにも柔弱、頼りない男たちというのが定番だが、それはまさに「路草」の「私」そのものなのだ。

たとえ民枝がいてくなくても、男ならば恋愛を生命にいつまでもしていられたかった。なかばミイラのようになっている私は、片路七銭の電車賃さえあれば行ける死に場所を、民枝と床の中で探すのであつた。結局、あそこが一番いいと定めたのは、海に近い相生橋だつた。死ぬ時はお揃いのサル股を穿こうなどと彼女は呟いた。

先ほどの民枝の口説きの続き、今度は入れ替わって合い方「私」の心裏語りというわけである。ここまで来ると、心中を覚悟するのではなくて、自分たちを心中物語に重ねて楽しんでいくとくである。深川の「相生橋」は島村利正の小説にもあるが、その名が恋に追い詰められた男女を誘うのだろうか。それにしても、「死ぬ時はお揃いのサル股を穿こう」とはよくぞ言ったもの。ここで嘖き出してしまわない読者はないであろう。たつぷり泣かせておきながら、最後に来てこんなぶっ壊しを言う、こんなことを書いてしまうの

は、書けるのは、この作者の他にはないであろう。しかしこのぶち壊しにこそ、現代では反ってリアリティーがあることもまた疑いない。そこが昭和版「曾根崎心中」なのである。

*

「路草」は、最初の単行本（昭和九年二月）では全五章であったが、後「日本現代文学全集84」（昭和四〇年九月、講談社）に収録されたとき、著者によって冒頭の一章「飛沫」が削除された。この文学全集で読んでいた私はそのことを知らずにいたが、今度この文芸文庫版には削られた一章「飛沫」を「参考資料」として巻末に収録することになった。おかげで私も初めて「飛沫」部分を読むことができたが、併せて削除した作者の意図もあれこれ推測することにもなった。

その一番の理由は、この「飛沫」に書かれている「N市」での生活は、そのあらましは後に繰り返し語られているから、話の内容としては無くても支障はない、というより、むしろない方が後の記述が活きて来るだろうという事実である。なかでも、ここで触れた心中ばなし、民枝の心中願望が「飛沫」で既に言われていたことに私は驚いた。そのことによつて、この「路草」が初めから、私の言う《道行き小説》として計画されていたのだという事実が明らかになったと思つたが、しかしそれならばいっそう、冒頭で予告されてしまったのでは、あの口説きの場が活きてこない、新鮮さを失うだろう、という事実も分

かつたのである。

「わたしと死んで頂戴！ 死んで行くのはミジメだわ。でもこうやって生きているよりはましよ。わたしを本当に好いてくれるなら死んで頂戴！」

聞き手の私は、譬えは渚に打ち上げられてアブアブしている小魚のような彼女をどうにもしてやれない無力な私は、只辛棒してくれとそればかり拝むように云うのである。

ご覧のように、これでは全く迫力がない。《道行き》にも《口説き》にもなっていないばかりか、こんなリハーサルのような予告編があつたのでは、後のあの熱い口説きの場面の効果も削がれてしまうだろう。やはり「飛沫」の章は無くてもよい、無い方が良いのだと、私にも納得できたのである。

*

川崎長太郎といえば、まず私小説であり、続いて娼婦小説である。そして、この二要素が一体となつているところに彼の文学の、他に例のない特異性、真骨頂がある。従つて、川崎文学について語るにはこの三つの面の性格、それぞれの関係性について言わなくてはならないが、そこがまた、難しいところでもある。看板が私小説一枚だけならば、ひたすらその質を問うことで作者にも迫れるであろうが、そこに娼婦小説という多分に風俗的な

要素が絡んで来ると、さて、どちらが主体、主題なのかという問題が生じてしまうからだ。娼婦小説という性格を中心に置けば、私小説性は単に方法として使われているにすぎないことになり、そうであれば、そんな私小説の質などは問うほどのことはないであろうからだ。

川崎小説を論ずるにはそんな難問が付きまとうが、そのところを意識したのが、浅見淵の解説であろう。

川崎長太郎は私小説作家ではあるが、心境作家ではなく風俗作家で、私小説的風俗作家として異色ある存在である。(「川崎長太郎入門」「日本現代文学全集84」)

さすがは長年の知己の言だと言わなければならない。

しかし私には、浅見淵は私小説というものを少々、志賀直哉を中心に考えすぎていると思われる。「私小説作家ではあるが、心境(小説)作家ではなく」とは、あからさまに言ってしまうえば、心境小説を書くような、書けるような、純粹な、あるいは立派な私小説作家ではない、という意味である。

たしかに川崎長太郎は「城の崎にて」(志賀直哉)を書くような作家ではなかった。彼の絶筆となった小説「死に近く」(昭和五八年九月、八二歳)は、いかにも円熟した日本作

家らしい、随筆とも紛う老境報告ではあるが、しかしそれは、諦念や人生哲学を語るような、いわゆる心境小説ではなかったのも事実である。

しかし、だからといって純粹な私小説作家ではないとするのは、私小説概念としては余りにも狭すぎるだろう。現に、私小説の極北だとさえ言われる葛西善蔵や嘉村礒多などは決して心境小説作家ではないし、また一方、心境小説の教科書的名作「虫のいろいろ」の作者たる尾崎一雄は、川崎長太郎小説を指して「日本私小説の純血種」だとまで言っている事実もある。そして何よりも忘れてはならないと思うのは、川崎長太郎は、あの、明治自然主義、いわゆる「無理想無解決」小説の大御所徳田秋声の推輓で世に出た作家であったという事実であろう。風俗小説は師匠譲りのお家芸でもあったのだ。

では、川崎長太郎はどんな風俗小説を書いたのか。そうした問いに答えているのが、たとえば本文庫に収録された「朽花」である。著者は、これも「参考資料」として収録した自作解説「『朽花』のこと」で、「友人の事件からヒントを得て、大体想像で」書いたと打ち明けている。つまり自身の体験に基づいた作品ではなかったのだ。作者周辺では知られたことのようにあったが、川崎長太郎も親しくした徳田秋声の長男、徳田一穂にあった「事件」をモデルに出来上がった一編だった。

当時、明治の娼娼運動の再興として盛んに言われた昭和版娼娼解放思想の実態を、その一つの具体例として描いたわけだ。そういう意味では作者も言う通り「社会小説、問題小

「説」でもあったのだが、むしろ、そのこと自体を主眼にしたわけではない。あくまでも川崎小説としてのカラーは棄てていない。そのあたりの事情も、「作者の精神としては決して妥協はしなかったつもり」だ、ともことわっている。新聞小説であったために会話を多用するなど、表現上の「妥協」はそれなりにあっただろう。しかし、出来上がった「朽花」一編は、それを先の浅見淵のことばに倣って言ってみれば、私小説的風俗小説ではあるが、私小説ではなくて、魂の入った風俗小説である、となるであろうか。

ところで、川崎長太郎には『路草』（昭和九年二月）に次ぐ二冊目の単行本であった作品集『朽花』（昭和十二年五月）であるが、ここに収められた九編はみな芸者や娼婦を描いた作品であった。さらに、表題に採られた中編「朽花」を別にして他の八編は全て、「自分ながらうんざりする程所謂私小説ばかり」だと、先の『朽花』のこと」には書いている。まさにフーゾク私小説集なのだ。これらは現在、この文芸文庫『泡／裸木 川崎長太郎花街小説集』（平成二十六年一月）で読めるが、私はこの一冊を、『路草』の〈道行き小説〉に並ぶ、〈川崎長太郎浮世絵小説集〉だなど読んだ。喜多川歌麿がたぐさんの、さまざまな美人画を描くことによって江戸庶民の夢を描き、時代を刻印したように、川崎長太郎も、その生涯を通して〈浮世絵小説〉を書き続けることで、一庶民として生きた自分と、その時代の証としたのである。

年譜

川崎長太郎

一九〇一年（明治三四年）

一月二十六日（戸籍上は二月五日）早朝、神奈川県足柄下郡小田原町万年三丁目四七〇番地（現・小田原市浜町三三三）に、父・川崎太郎、母・ユキの長男として誕生。川崎家は代々、主として箱根温泉旅館相手の魚商。家族は他に祖父・竹次郎、祖母・ツヤがあった。幼少時は祖父母の溺愛の内に育つ。

一九〇八年（明治四十一年） 七歳

四月、第一尋常高等小田原小学校（現・市立三の丸小学校）に入學。

一九一二年（明治四五・大正元年） 一一歳

九月、弟・正次が生まれる。この年、学習意欲が出て成績も向上。算術、綴方、地理が得意科目となる。

一九一四年（大正三年） 一三歳

三月、尋常科を卒業。卒業時はクラスで二番目の好成绩。四月、高等科へ進學。

一九一六年（大正五年） 一五歳

三月、高等科を卒業。四月、父の旧友の勧めで渡鮮。土木技師になるつもりで龍山の漢江架橋工事場の雑役係となるが、ひと月半ほどで脚気になる。辛うじて小田原に帰り着く。

一九一七年（大正六年） 一六歳

正月、中学に入るため新聞配達を始める。四



Kodansha Bungei bunko

みちくさ くちはな かわさき じょう ちゅうめい ちゅうさ
路草／朽花 川崎長太郎初期名作集
かわさき じょう ちゅうめい
川崎長太郎

2025年 8月 6日 第1刷発行

発行者..... 篠木和久
発行所..... 株式会社 講談社
〒112-8001 東京都文京区音羽2・12・21
電話 編集 (03) 5395・3513
販売 (03) 5395・5817
業務 (03) 5395・3615
デザイン..... 水戸部 功
印刷..... 株式会社KPSプロダクツ
製本..... 株式会社国宝社
本文データ制作..... 講談社デジタル製作



©Hiroko Kawasaki 2025, Printed in Japan
定価はカバーに表示しております。

落丁本・乱丁本は購入書店名を明記のうえ、小社業務宛にお送りください。
送料は小社負担にてお取り替えいたします。

なお、この本の内容についてのお問い合わせは文芸文庫（編集）宛にお願いいたします。
本書のコピー、スキャン、デジタル化等の無断複製は著作権法上での例外を除き禁じられています。
本書を代行業者等の第三者に依頼してスキャンやデジタル化することは
たとえ個人や家庭内の利用でも著作権法違反です。

ISBN978-4-06-540422-5

本書は「川崎長太郎自選全集Ⅰ」（一九八〇年四月、河出書房新社刊）を底本としました。本文中明らかな誤記や誤植と思われる箇所は正し、ふりがなを調整しました。なお、本文中に今日の人権意識からは不当ないし不適切と思われる語句や表現が存在しますが、著者が故人であることと時代背景および作品的・資料的価値に鑑み、そのままといたしました。御理解のほどよろしくお願い申し上げます。